

聖書:ルカの福音書8章1～21節

説教:忍耐して実を結ぶ

はじめに

今日の箇所の中に出て来る「種蒔きのたとえ」は、どこかで一度は聞いたことがあるでしょう。イエスが解きあかしをされていますから、意味は分かります。しかしそれですべてすっきりしたわけではありません。種蒔きのたとえの話の次に16節で明かりの話が出てきて、19節になるとイエスの母は兄弟の話に突然のように変わってしまい、前後のつながりがみえなくて戸惑います。加えてここには「神の国の奥義」とあって、いったいなんだろうかと興味が湧きます。きょうは、このたとえ話の本当の意味は何か、そして神の国の奥義とはなにかについてご一緒に考えてまいります。

1 わたしの母、わたしの兄弟

ときどきこんなことを質問されることがあります。「一人で聖書を読んでもわからないけれど、わかるようになるための秘訣を教えてください。」私も教えてもらいたいくらいです。それでもこうすればいいですよ、ということが少しはあります。その一つが、似たようなこと、あるいは出来事が近いところに書かれていないか捜してみる、ということです。

この箇所であれば21節です。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行方の人たちのことです。」たまたまこうだったから書いた、のではありません。理由があるから書いている。その理由はなにかと考えるときに、今言ったテクニックを使う。似たような話がどこかにないかを捜すのです。思いがけないところにあります。1節後半から2節。「十二人もお供をした。また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの執事クエザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。」

十二人がわたしの兄弟、イエスに仕えていた女性たちがわたしの母。そんな対応関係が見えてきませんか。この箇所は、イエスに仕える女性たちや男たちの話しにはさまれるようにして、真ん中に種蒔きのたとえが置かれている。このことが、この箇所を理解するのにどんな関係があるのか、不

審に思われるかもしれません。これからじょじょに明らかになります。

2 種蒔きのたとえ

1) イエスの解き明かし

種蒔きのたとえの意味については、これ以上の説明はいらないでしょう。神のみことばである種が、四つの種類の土地に落ちてそれぞれどうなったか。最初の三つはいずれもだめだったけれど、最後の良い地に落ちたものだけが実を結ぶことができた。その良い地とは、15節にあるように「立派な良い心でみことばを聞き、それをしっかり守って忍耐した人たち」のことを指す。

2) 疑問

このたとえ話を聞いて思うでしょう。できるなら私も四番目の良い地になって、良い実を結ぶ者になりたい。しかし我が身を振り返れば、良い地とはとても言えない。がっかり気を落とす。そういう方が多いのではないか。結論から言えばがっかりする必要はない。その理由は後で述べます。

そしてもう一つこのたとえ話を聞いて疑問に思うことがある。蒔かれた種は神のことばだと言う割には、この種、あまりにも力がないと思いませんか。悪魔が来て持って行かれてしまうし、根を張ることができずに枯れてしまうし、茨にふさがれて実が熟さない。さんざんです。たまたま数万分の一の確率で良い地に落ちた種だけが実を結ぶことができる。こうなると神のみことばの種が実を結ぶのは、宝くじが当たるような運次第ということになる。

でも創世記の最初はどうでしたか。1章3節で「光、あれ」と神が仰せられたら光ができました。同じようにしてこの世界は神のことばによって創られた。それほど神のことばには力があるのに、いざ私たちのことになるとまったく力がないのはどうしてか。なにかおかしいと思いませんか。

3 神のことばの力

1) 誰に語ったのか

これらの疑問を解いていきます。そこでまず手始めに、このたとえ話は誰に語られたのかを確認しておきましょう。このことはすぐにわかります。4節。「さて、大勢の群衆が集まり、方々の町から

人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。」群衆にはたとえ話だけを語ったけれど、たとえ話の意味は弟子たちにだけ解き明かしています。そのときイエスは10節でこう語っています。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。」

「これが神の奥義ですよ」と言って、特別に弟子たちに丁寧にイエスが解説してくださったのですから、さぞかし弟子たちはたとえ話の意味をきちんと理解し、良い実を結ぶために一生懸命精進したに違いないと思うわけですが、そうではない。この後、弟子たちが船で湖を渡っていきますが、ご存じのように湖の真ん中で大嵐になって船が沈みそうになります。そのときイエスは弟子たちに向かって、「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」と叱る。神の国の奥義を教えてもらったのに、弟子たちの信仰はこの程度だったのです。とても立派な良い心を持っているとは言えません。

2) たとえ話と弟子たち

そこで考えます。この種蒔きのたとえ、一般的なお話なのかと思っていただけれど、実は誰かのことを頭に浮かべながら語っているのではないか。最初の所で、この箇所は十二弟子とイエスに仕えていた女性たちにはさまれるような形で書かれていると申し上げました。このことから、このたとえ話、実は弟子たちのことを語っているのではないかと思ひ至るわけです。

そういう前提に立つと、このたとえ話は弟子たちのこととして解釈し直してみなければならぬ、ということになる。順序を逆にして三つ目のたとえから見ていきます。イエスに従っていた最初の頃は、彼らは純粋でした。ところが悪霊を追い出す力を持つようになると、だんだん高ぶってきて将来誰が大臣の椅子に座るかを競争し、不信仰になっていきます。まさに、生活における思い煩いや富や、快樂でふさがれてしまうのです。二つ目の岩の上の種についてはどうか。イエスが逮捕されて裁判にかけられたとき、ペテロはイエスを三度否定しました。他の弟子たちは、イエスを捨てて逃げ出し、部屋に鍵をかけて隠れてしまう。最初、みことばを聞いて喜んでイエスに従っていたのに、試練がやって来ると身を引いてしまう。そして結局一つ目のたとえになってく。弟子たちはイエスのことばを間近で聞いていたのに、いざとなったら心の中

に何にも残っていなかった。それはイエスからご覧になれば、まるで悪魔がみことばをさらっていたように見えるほど、ひどいものだった。

3) やがて実を結ぶ

こうして見ると、三つのたとえはすべて弟子たちにぴったりあてはまる。では、そこで終わりなのか。終わりではありません。私たちはこのあと弟子たちがどうなったのかを知っています。よみがえられたイエスに出会った弟子たちは、生き方が百八十度変えられ、隠れていた部屋から出て行ってよみがえりのイエスを伝える者になっていく。まったく実を結ばない、悪い地にしか見えなかったのに、実が熟し、実を結んでいった。四つ目のたとえも、ちゃんと弟子たちにあてはまるのです。

そうするとこういうことになる。最初読んだときは、神のみことばの種、あまりにも力がなくて、実を結ばせるためには、人間が一生懸命努力して良い心になって、しっかり守ってやらないといけない。そう思っていました。が、ぜんぜん違う。弟子たちの土地がもともと良い土地だったのではないのです。ひどい荒れ放題の土地だった。それでも、最後は実を結んだ。一度落ちた神のみことばの種は、やはり世界を造る神のみことばですから、それほど力があつた。

4) 神の国の奥義

でも15節のみことばはどう考えたらよいのでしょうか。「しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」

よく考えたら、忍耐したのはいったい誰だったのか。弟子たちですか。いいえ。忍耐せずにイエスを捨てました。そんな弟子たちを忍耐したのはイエスの方です。どうしようもない弟子たちを、立派な良い心にしたのは誰ですか。イエスです。一度蒔かれた種は持ち去られ、枯れてしまい、ふさがれて、見えなくなりましたが、それでも最後には実を結んでいく。16節に出てくる明かりのたとえは、そのことを語っている。みことばの種は、人の目にはまったく力がなくて弱々しく、すぐに消えてなくなるかに見える。ところが、必ず最後には人の目にはっきりと見えるようになり、人々を明るく照らしていく。それほど力を持っている。これが「神の国の奥義」だったのです。

弟子たちがやがてイエスを見捨てていくことを、イエスはご存じです。それでもイエスは弟子た

ちに向かってこう言われます。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちのことです。」

神のことばを聞いていても、行うことができなかつた弟子たちなのに、こう言ってくださる。なぜですか。神のことばは、どんなに悪い土地であろうとも必ず実を結ぶと知っておられるからです。

ならば、私はどうするのでしょうか。私は良い地ではない、立派な良い心也没有、忍耐もできない薄っぺらな信仰しかなくてクリスチャン失格、天国に行く資格はありませんと嘆いていても、大丈夫。あなたはわたしの母、わたしの兄弟ですと、イエスは呼んでくださるのです。この方が実を結ぶ者に私たちを変えてくださることを信じて、この方と共に歩んでまいります。